

2024 年度 学校評価（慶應義塾湘南藤沢中・高等部）

Ⅰ. 教科における自己評価

評価方法	年度当初に各教科の学年、分野毎に授業担当教員が授業計画と目標設定を行い、資料を作成する。 年度末に、授業計画の実施状況と、目標の達成度について授業担当教員が4段階で評価を行う。 A 達成できた（80%～100%）／B ある程度達成できた（60%～79%）／C あまり達成できなかった（40%～59%）／D 達成できなかった（～39%）
総合評価規定	各教科の学年、分野毎の評価を集計し、以下の計算で算出されたものを総合評価とする。 各分野と学年の評価を数字に換算 A→4 B→3 C→2 D→1 その平均を総合評価点とし、下記基準でアルファベット4段階とする。 A 達成できた（総合評価≧3.2）／B ある程度達成できた（総合評価≧2.4）／ C あまり達成できなかった（総合評価≧1.6）／D 達成できなかった（総合評価＜1.6）

教科	目標と具体案	結果	次年度への課題と対策	中期的な課題	前回評価	今回評価
国語	中等部では、正しい日本語の表記と基礎的な言語活動方法の習得を目指す。言語活動を通して社会の様々な側面に触れることで、人々や社会への関心のもと主体的に思考する土壌を形成することを目指す。 高等部では文章を批判的に読解し、検証できるようになるための手法を学習する。生徒が自分で問題を発見し、解決する力を養うことを重視する。あわせて、論文を書くためのスキルの体得を目指す。 中高問わず、授業での古典籍の使用、百人一首大会、能狂言鑑賞など、本物に触れることで日本の伝統文化に関する知識・教養を得ることに主眼を置いている。 国語科は下記のゴールにしたがって、各学年で実践の形態を考えて教科指導を行う。「具体案」は右記「結果」に寄せることで示す。 - あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる - 飢餓を終わらせ、食糧安全保障および栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する - あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する - すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し生涯学習の機会を促進する - ジェンダー平等を達成し、すべての女性および女児の能力強化を行う - すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する - すべての人々の、安価かつ信頼できる持続可能な近代的エネルギーへのアクセスを確保する - 包摂的かつ持続可能な経済成長及びすべての人々の完全かつ生産的雇用と働きがいのある人間らしい雇用（ディーセント・ワーク）を促進する - 強靱（レジリエント）なインフラ構築、包摂的かつ持続可能な産業化の促進及びイノベーションの推進を図る - 各国内および各国間の不平等を是正する - 包摂的で安全かつ強靱（レジリエント）で持続可能な都市および人間居住を実現する - 持続可能な生産消費形態を確保する - 気候変動及びその影響を軽減するための緊急対策を講じる - 持続可能な開発のために海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する - 陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処、並びに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する - 持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を促進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供し、あらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包摂的な制度を構築する - 持続可能な開発のための実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する	どの学年においても、授業内活動および課題を通し、生徒に幅広い言語体験を促すことができた。 【全学年】 年間を通じた漢字テストの実施(4) 「読書ノート」等を通した自主学習の促進(4) 【1年】 様々な本屋の工夫を調査し、本との出会いを魅力的にするアイデアを考える(11) 年賀状の書き方、書き初め、ポスターを書く(4) 【2年】 あらゆるジャンルの本を読み、社会のいろいろな問題に目を向けるきっかけを作る（3・4） 宮沢賢治・柳田国男を通して、自然と人間の関わり方、経済社会とのバランスを考える（1・9・10・14・15） 「学び」をテーマとした問いを作り、その問いに対する意見文を書く（4） 古典作品にふれ、それらと現代の文芸とのつながりを知る（4） 【3年】 四国・広島修学旅行に先立つ読書（11,12,14～16） 唐代の漢詩を通じて、人生について考える（1・3・4） 「平家物語」を通じて、権力について考える（10） 正岡子規の人生と俳論を通じて、革新の精神を知る（9） 歳時記と「古今和歌集」を通して、日本人の季節感について考える（4・11・14・15） 客観描写で句作をする（4） 和歌の修辞技法を学ぶ(4) 戯曲を通じて、他者の言葉の力を知る（4・5・16） メディアリテラシーに定義を与え日常と照らし身につける（1・4・16） 文化文明と哲学的思考の関連を知る（3・4・10・11） 社会科公民分野の学習と時期を合わせた読書（1～17） 年度の後半に週一回ペースで行った、全員参加形式ニュース報告ワーク（1～17） 【4年】 読点の用法・接続詞の用法の探究（4） 論説文の読解（3・4・10） 基礎レベルの論証およびクリティカルシンキング（4） レポート・論文にふさわしい書き方の習得（4） 遺伝子検査に関する小論文執筆（3・4・10） 災害関連死に関する小論文執筆（1・3・4・6・10・11） 世界の哲学・思想とその違いに関心を持つ（4） 世界の宗教とその違いに関心を持つ（4） さまざまな思考法を知る（4） 自ら選んで教養を高める課題を通して、生涯学習の基盤をつくる（4） 読書を通して社会の様々な問題を知り、自ら考える土壌を形成する（1～17） 俳句の鑑賞(4) 俳句の吟行および句会（春・秋・新年）(4) 百人一首鑑賞(4) 古典の鑑賞『宇治拾遺物語』『方丈記』『土佐日記』（4） 漢詩の鑑賞(4) 漢文に触れる 故事・論語(4) 【5年】	一見関わりのないように思える国語科の営みが、SDGs と如何に繋がってきたか、如何に繋げていくかを、より深い所で考察し、共有しながら課程を進める。	言語体験の差および基礎知識の差にどのような対策を講じるか、引き続き検討と日々の工夫が必要である。	A	A

		生物多様性について議論し、その価値を感じさせる企画を考える（14・15） 石牟礼道子「苦海浄土」からエコクリティシズムを執筆する（14・15） 夏目漱石「こころ」を通じて近代に向き合う（16） 能狂言鑑賞教室(4) 『源氏物語』『枕草子』。平安時代の女房文学について考える（4・5） 京都奈良修学旅行を通して、文化・歴史・伝統について考える（9・11・15） 性善説・性悪説について考える（16） 文学史（4） 『西鶴諸国ばなし』女性登場人物のせりふの論理性を考える（5） 文学散歩の企画・実践（4・11） 【6年】 現代文学に通底する思想について理解した(4・16)「山月記」「小説とは何か」等 戦時下における文学の状況について関連教材を通して理解した(16)「日本文化私観」等 『古事記』を通して出雲・九州の風土と生活・文化を知ることによって日本の歴史を学ぶ（10） 「本居宣長」の考えを学ぶことで、教育の大切さを学ぶ（4） 古典籍を通して、日本に古くからある紙の役割と今後の紙資源の必要性を考える（9） 古典文学作品について、ゼミ形式で調査・発表・質疑応答 『源氏物語』『雨月物語』『椿説弓張月』				
社会	中等部では地理・歴史・公民の三分野にわたり、バランスよく基礎学力を習得することで、多角的かつ幅広く社会をとらえる視点を持つことを目標とする。また、物事を感情的に捉えるばかりでなく、知識を蓄えた上で論理的に解決するための力を養う。 高等部では、社会問題に対して主体的に関心を持ち行動できるようになるために、基本的な知識を蓄えた上で、自己の考えを持ちつつ他者の意見を尊重する力、そしてそれらを他者と議論した上で、行動に移す力を養うことを目標とする。また、学部選択を見据えて各科目高度な専門的知識を習得するばかりでなく、習得した知識を用いてアウトプットできるようにプレゼンテーションや論述の機会を多く設ける。 修学旅行や特別カリキュラムを通して史跡や企業・公的機関への見学を実施し、実際に自身の目で見ることにより、授業で習得した知識について考え、理解する機会を設ける。 同じく、様々な業種の方々から直接話を伺うプログラムを実施し、将来的なキャリアに対する意識形成も目標とする。	中等部では、1年生で地理・歴史分野を学習した。基礎的な知識の定着を狙いとするが、教科に対する意欲や知的好奇心はあるものの、中学入試で社会を受験していない生徒を中心に知識定着には苦勞をしている印象があった。 大学（文学部民族学考古学専攻）から貸していただいている縄文土器が、神奈川県埋蔵文化財センターにより横浜市歴史博物館に展示された。1年生を中心に観覧する機会を持ち、大学・地区・中高の連携となった。 2年生の地理分野では、1年生で学習した内容をより進め、世界へと目を向けてSDGsについても意識を深めた。公民分野では、模擬裁判や模擬国連などを行い、体験的な学習を行った。 3年生では、歴史・公民分野を学習した。歴史では史料の解釈など、物事の多角的な見方を身につけ、公民では、NIE学習を行いながら、政治・経済ともに日々更新される時事的な情報に常に触れることの重要性を理解できた。また、経済分野では「株式学習ゲーム」を取り入れ、実際の経済状況の変化と株価の連動を実体験することができた。 高等部では、4年生で「地理総合」「歴史総合」を学習した。「地理総合」では、地理情報システム（GIS）を用いて情報を分析することで、視覚的・多角的に理解を深めることができた。「歴史総合」では、包括的でグローバルな視点での授業を実施することができた。 5年生では、「世界史探究」と「公共」を昨年度から新たに実施した。「世界史探究」では6年次にも引き続き学習する事を見据えての授業展開を行った。「公共」は、18歳選挙権を意識した授業展開を行いつつ、将来の学部選択・職業選択を意識して実施している。 6年生では、旧カリキュラムで週に1時間のみだった「倫理」を週に2時間行うことで、哲学的視点を身につけながら宗教についても多面的に理解することができた。他にも、選択授業を通してより専門的な内容を学ぶことで、自らの考え方の幅を広げ、差し迫った学部選択に寄与することを意識して展開することができた。 特別カリキュラムでは、日吉地下壕見学、物流見学、租税教室・キャリア教育プログラムを実施し、机上では得られない経験をすることができ、実感を持って学習することができた。	中等部では、1・2年次に探究的学習を多く取り入れたが、比較的積極的に取り組む生徒が多かったので、続けたい。また、3年次に行った新聞を用いるNIE学習は、普段SNSを通して偏った情報ばかりに接している生徒が多い中で、広い視野と考え方を身に付ける上で非常に効果的であった。さらに自身の意見を持ちながら他者の意見を取り入れることの重要性にも気づくことができたので、続けていきたい。今後の課題としては、集めた情報の取捨選択をする力と論理的な思考力の育成も重視する必要がある。プレゼンテーションやレポート・論述問題により、その課題に取り組みたい。 高等部では、引き続き大学における「研究活動」をターゲットとし、6年生「論文実習」の履修を前に,論理的思考力をより養い,客観的論述の訓練をすることが必要になる。論理的思考力を高めるためには、一定の知識も必要であるということを意識させ、知識の定着と思考力の育成の好循環を図れるようにする。そのためにも、幅広い書籍に触れ、必要な情報を収集する力と情報を取捨選択する判断力を磨く必要がある。 6年次の政治経済がなくなったことにより、法学部への関心が薄れているように感じるため、選択授業の科目を検討する必要がある。	初等部との関係の方法を模索しつつ、中高6年間のカリキュラムについて引き続き検討を行う。 中等部においては帰国生などを中心とする基礎知識の未定着に対し、どのような対策を講じるべきか、「社会科」への興味関心を惹きつつ最低限必須とする項目の選定などの検討が必要である。 「知識」の定着と「学問への入り口」への興味関心の喚起の両立が課題といえる。 高等部については、昨年度より新しく設置された「総合」「公共」の内容及び位置付けを検討していきつつ、社会問題を主体的に捉えて解決していく人材を育てていくための経験的学習や探究的学習、そして専門的な学習が必要といえる。	B	B
数学	中等部の代数分野では、3年間を通じて基礎的な計算力を確実に定着させるとともに、関数の概念を深く理解し、高校数学への確かな土台を築くことを目標とする。幾何・確率統計分野においては、数学の持つ美しさを発見するとともに、データを活用した問題発見・問題解決の力を養うことを重視する。また、中等部の1・2年生では、一人の教員が4時間の授業を担当し、継続的かつ体系的な指導を行う。 高等部では、4・5年次において、全員が代数・幾何・解析・確率統計の基礎を学び、幅広い数学的知識を習得する。6年次では、進路に応じた専門性を高めるため、I類では経済学などの学習に必要な微積分・統計を重点的に学び、II類では理工学部・医学部・薬学部などの進学を視野に入れ、より高度な数学を探究する。 I類・II類を問わず、数学を通じて論理的思考力を養い、客観的に物事を分析し、自らの考えを明確に説明できる力を育むことを目指す。また、データサイエ	中等部 授業の冒頭に行う計算練習が定着し、効果的なウォーミングアップとなっている。これにより、生徒は自身の理解不足や計算ミスの傾向を把握しやすくなり、教員も個々の課題を適切に把握できる機会となっている。 また、1・2年生では、2019年度より小教科に分けず、1人の教員が週4時間すべてを担当する体制を導入した。その結果、生徒の理解度や到達度をより詳細に把握できるようになり、個別指導の質の向上につながっている。また、課題の量を適切に調整できるようになり、試験科目数の削減による学習負担の軽減も見られている。 高等部 十分な授業時間を確保することで、理工系学部への進学者はもちろん、文系学部を志望する生徒にとっても数学的思考力を養い、進学後に必要な基礎的な数学力を身につけることができています。 内容が高度化する4・5年生では、これまでの教育レベルを維持しつつ、数学に興味を持つ生徒を増やすことを目指している。特に4年生の数学Iでは、1クラス約20名の少人数教育を導入し、今年度で5年目を迎えた。この取り組みにより、生徒一人ひとりととの距離が縮まり、各自の理解度や学習姿勢をより細かく把握できるようになっている。 統計教育の充実	5年数学Ⅱbのデータサイエンスの内容については、2023年度実施状況を踏まえて取り扱う順番を変更した。2025年度については2023・2024年度の実績をもとに冊子化を行い、全員が取り扱う内容に追加して発展的な内容を充実させる予定である。 初等部1期生が本校の課程を終了した。現状では大きな問題はないものと認識しているが、これまでの本校での教育レベルを維持し、より数学に興味をもつ生徒が増えるよう努力していきたい。 引き続き、IT機器の利用やアクティブラーニングの試験的な導入を積極的に進めていきたい。	新学習指導要領が求める「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、引き続き授業改善を推進する。また、数学的な活動を通じて、数学の世界と現実世界を行き来する学びを促し、生徒の学習意欲を一層高めるようカリキュラムマネジメントを強化していく。 さらに、政府が掲げる「数理・AI・データサイエンス」人材の育成を意識し、数学教育の観点からDX社会で活躍できる人材の育成を推進する。	B	B

	ンス教育を充実させ、デジタル社会における数理的な課題解決能力を備えた人材の育成にも力を入れる。	開校以来力を入れてきた統計教育においても、着実な成果が表れている。6年生の選択科目「データ解析」では、毎年統計関連のコンクールに参加し、引き続き入賞者を輩出している。 また、文部科学省の学習指導要領改訂により、中学校段階で統計学の内容が増加したことを受け、5年数学Ⅱbの記述統計学の多くが中等部へ移行した。これに伴い、2023年度からデータサイエンスの内容を強化し、情報Ⅱの一部（重回帰分析・クラスター分析・決定木）を全員必修とした。これにより、データ活用の実践力を養い、現代社会で求められる数理的思考の育成を図っている。				
理科	基礎知識の習得に加え、観察・実験の体験を通して論理的に考える「科学的な視点」を身につけることを目標とする。 中等部では、恵まれた自然環境・設備の中で数多くの観察・実験を行っている。キャンパス内の植物の観察や7つの理科室での実験を通じて本物に触れ、自然の事象や現象についての理解を深め、法則性を見出すことを目標としている。また、1年生においては、本年も継続して少人数教育を試行する。 高等部では、教養としての科学と位置づけ、物理・化学・生物・地学のすべての領域の科目を必修とし、生徒の興味や進路希望に柔軟に応えられるよう、選択科目を設置している。観察・実験を通じて、自分の言葉で結果・考察をまとめてレポートを作成し、理論の理解を深めることを目標としている。また最新のトピックに触れたり、大学や卒業生と連携することで高度な内容にも取り組むことを目指している。	<総括> 中等部では、各学年に応じたやり方で実験や観察を多く取り入れる授業を展開し、生徒の理解を深めることができた。特に1年では、昨年に引き続き少人数教育を実施し、十分な成果が得られている。授業で取り組む課題の指導をきめ細やかに行い、提出物などのフィードバックも間をおかずにできるため、生徒によって異なる理解度・習熟度をつぶさに把握できるようになった。校外学習として、1年は新江ノ島水族館、2年は日本科学未来館、3年は国立科学博物館の見学を行った。 高等部では、例年と同様に講義と実験をバランスよく実施し、基礎的な理論を理解させた上で、実験手法などの定着をはかることができた。また、「地学基礎」（2単位）は、観察・実験で得たデータを基に授業を展開するように努めた。そして、論理的思考力を育成するため、文章で答えさせる（書かせる）機会を度々設けた。その結果、多くの生徒は、論理的な文章表現力が身についた。また、北陸修学旅行に、地学の観点で事前・事後学習を取り入れ、現地での学びと合わせ一定の効果が得られた。感染症拡大の影響で見送っていた、唾液を用いた遺伝子検査実験を今年度より4年生で行った。 <SDGsを見据えた取り組み> 物理・化学分野： エネルギーや資源の利用に関わるものとして、脱炭素化、クリーンエネルギー、資源リサイクルなどのトピックを取り上げ、実験後の廃液処理について、その意義を理解させるなど今後のあり方を考察した。 生物・地学分野： 1年で学校周辺の自然環境調査を実施し、そのデータ分析などを通じて、地球環境の保全と利用について理解を深めた。解が何通りも存在する議題に科学的見地からどのようにアプローチしていくべきか等、問いを投げかけた。 3年では、陸域から海洋へのプラスチック流出のメカニズムやその影響について理解するため、水域のプラスチックが紫外線を受けて微細化し、マイクロプラスチックとなるメカニズムや、マイクロプラスチックが生態系や人間社会に及ぼしている影響について、具体的なデータを用いて解説・実験を行った。	中等部では、1年生のみ週4時間（1分野・2分野）の少人数教育を引き続き実施していく。よりよい形の授業スタイルを模索しながら、高等部でのより深い学びにつながるカリキュラム作りを固めていく。一方、2年生以降は少人数教育ではなくなるが、引き続き細やかな指導ができるよう、授業スタイルおよび課題のフィードバックのよりよい方法を構築していく。	中等部では、引き続き、初等部からの一貫教育を活かした授業展開を目指す。初等部での学びを経てきた者、帰国のため入学前に理科を学んでいない者、入試のため理科を手厚く学んできた者など、バックグラウンドの異なる多様な生徒を1つの集団に抱えて授業を展開する上で、知識量の差や、実験・観察に必要な技術習熟の差をいかに補っていくかが、大きな課題となっている。1年生については2019年度より継続している少人数教育の特性を活かして、個々人へのきめ細やかな指導を行うにあたり、より効果的な手法を模索していきたい。	A	A
音楽	中等部は基本的な力を養うことに重点をおき、指導する。基礎的な音楽理論および音楽の歴史について学習し、音楽への理解を深める。また演奏や鑑賞を通して、音楽活動をする楽しさを感じることを目的とする。 高等部では、より専門的な音楽の理解を深めるよう促す。作曲などを通して、より深く音楽理論を理解できるようにする。また打楽器やギターの演奏、西洋音楽史などを通して音楽の本質に触れることを目的とする。	実技の分野で1年生はコロナ以降、はじめてリコーダーを再開することができた。リコーダーを行うことにより、音程感覚や楽譜の読み方の基礎を養うことができた。 歌唱では、中等部生は3月の合唱コンクールのため、しっかり声を出して歌うことができた。しかし、音楽的な表現の工夫があまりできていない学年が多かったため、これは来年度以降の課題としたい。 高等部の歌唱ではイタリア歌曲のレッスンや声楽のアンサンブル、合唱を行うことができた。体をしっかり使って声を出すことや、合唱の基礎的な指導に時間をかけて指導した。歌唱を通じて、音楽をする楽しさや、喜びを感じることができた生徒は多く、一定の成果が見られた。 音楽理論の学習に関しては、中等部、高等部ともに、音楽理論の学習がなかなか進まなかったり、学習したことが定着しづらいという現状がある。家庭学習の習慣を身につけさせるよう、工夫する必要があると感じている。 中等部 1年（6クラス）週2時間 歌唱、リコーダー、音楽鑑賞、音楽理論 2年（6クラス）週2時間 歌唱、音楽鑑賞、音楽理論 3年（6クラス）週1時間 歌唱、音楽鑑賞、音楽理論 高等部 4年（6クラス／音楽選択者のみ）週2時間 4月～9月 歌唱、音楽鑑賞、音楽理論 10月～3月 ギター 5年（6クラス／音楽選択者のみ）週2時間 歌唱、打楽器アンサンブル、音楽鑑賞、作曲	来年度は、中等部1，2年生が2リコーダーを使った授業ができる予定である。音程感覚を身につけることを意識して授業を行う。 また、歌唱では発声の基礎を身につけると共に、歌詞を理解して表現を工夫したり、情景を思い浮かべて演奏したりできるよう、表現の幅を広げることができるよう指導をしていきたい。	音楽理論については、学習習慣を身につけさせ、音楽理論について、しっかり理解できるようにすると共に、学習した音楽理論を演奏に生かすことができるよう指導する。	B	B

美術	身近な物や風景をモチーフとし、絵画や塑像の基本的な制作技術、またそれに伴う観察力の成長を促す。また与えられたテーマから自由に発想し、そのイメージを作品として成立させる能力を養う。 中等部段階では、身近な物をモチーフとすることで見ることの重要性を認識させる。また経験のある素材を中心に使用することにより、基礎的な技術の向上と表現の幅を広げる。 高等部では専門的な素材を使用し美術の知識を深めながら作品の成立を目指す。年代に応じて技術や素材を発展させ幅広い経験を得ながら、豊かなイメージ力と再現能力を養う。 全学年を通し、個性を尊重し多様な作品が並ぶことを目標とし、生徒同士がお互いの作品を鑑賞し個性を認め合える環境を整える。	中等部、高等部共に、例年通りの課題を行う事が出来た。 観察を主眼に課題を制作しているため、個人制作が中心となっている。個々の能力に応じた指導を行いながら、集中して取り組むことが出来る環境を整えられている。授業内容は以下の通り。 中等部 1 年（6 クラス） 1 期 塑像（手） 2 期前半 版画（顔） 2 期後半・3 期 水彩（風景） 2 年（6 クラス） 1 期 スクラッチ 2 期 平面構成 3 期素描（靴） 3 年（6 クラス） 1 期 模写 2 期 静物画 3 期 塑像（顔） 高等部 4 年（3 クラス） 1、2 学期 油彩／陶芸 3 期 石膏デッサン 5 年（3 クラス） 1、2 学期 スクリーンプリント／陶芸 3 期 細密デッサン ＊高等部の 1, 2 学期は学期ごとに入替制を取ってる。 6 年（選択授業） 陶芸上級 絵画上級（古典技法） 中等部では、複数回利用している素材、特に塑像や水彩は顕著に技術の向上がみられた。また観察という点においても注意深く観察し形態の比較をしながら作品に反映させる力や、現実の距離感を平面上に置き換える空間把握の能力の向上がみられている。高等部では新しい素材の利用を通し、幅のある体験をさせることが出来た。素材のコントロールに苦労はしながらも、今までの経験を生かしながら素材の特徴を考え作品を完成させていく臨機応変に対応できる能力に成長を感じた。 陶芸では毎年大量の削りカスや失敗した粘土が出るが、本校は大型の鑿岩機 1 台、大型ドレン機 2 台を有しており、ほぼ 1 0 0 パーセントの再利用ができている。また絵具を使用する課題では、無駄が出ないよう再利用や保存方法を工夫している。	生徒に課題の目的を明確に伝え、個人制作に取り組む集中力の向上と課題への理解を深める。また自の失敗や思うように出来ないことを体験させ、それを克服するための課題や対策を考える姿勢を促す。 課題の検討を始める。	年々変化していく生徒の状況に合わせ、今後の数年間の取り組みとして課題を再検討していく。	B	B
	体を動かす喜びを体験させ、生涯にわたって運動に親しみ取り組むきっかけとし、社会生活を営む為の基礎作りを目指す。 基礎体力の強化に加え、体のバランスや調整力を養う運動も取り入れる。 安全に対する知識・行動・判断力をつけ、周囲への配慮もできるよう、道徳教育的側面も意識しながら集団の中での態度、姿勢についても指導し、バランスのとれた教養人育成に教科として貢献する。	今年度も全ての授業を対面で展開することが出来た。引き続き、中高共に安全面、インフルエンザ・コロナ感染予防対策を最優先に、さらに 5・6・7・9 月は熱中症対策を考慮しながら授業を実施。また 9 月の気温上昇にともない、9 月 2 週目（2 学期 1 週目）まで、全学年で水泳授業を行った。運動を楽しむために必要な基礎技術習得を意識し、体力向上にも重点を置き、また最終段階でゲーム形式の授業も展開することが出来た。 特筆すべき内容として、以下の事例が挙げられる。 5 年体育実技 ○週 2 時間の運動は、技術の定着が難しく、基礎体力の持続に留まった。 しかしながら、5 年生ということもあり、授業内容の理解が早く、円滑に進めることができた。 4 年保健 ○現代社会と健康（健康の考え方と成り立ち、運動と健康、食事と健康、休養・睡眠と健康、喫煙と健康、飲酒と健康、薬物乱用と健康、精神疾患の特徴、精神疾患からの回復、健康に関する意思決定・行動選択、健康に関する環境づくり） ○安全な社会生活（事故の現状と発生要因、安全な社会の形成、交通における安全） 特に一次救命の応急手当ての中から、包帯法を中心に行之い、関連させて防災教育を主体的に行う。 5 年保健 2023 度より現役の医師が 5 年全クラスの授業を行い、健康を保つことの大切さ、生涯を通じて重要な土台となることを、より深く、さらに自分のこととして捉えられるよう授業を展開することが出来た。 ○現代社会と健康：私たちの健康のすがた、生活習慣病の予防と回復、がんの原因と予防、がんの治療と回復、精神疾患の予防、現代の感染症、感染症の予防、性感染症・エイズとその予防 ○生涯を通じる健康：ライフステージと健康、思春期と健康、性意識と性行動の選択、妊娠・出産と健康、避妊法と人工妊娠中絶、結婚生活と健康、中高年期と健康、働くことと健康、労働災害と健康、健康的な職業生活 ○健康を支える環境づくり：大気汚染と健康、水質汚濁・土壌汚染と健康、環境と健康にかかわる対策、ごみの処理	安全性を確保し、感染予防、熱中症対策を継続しながらも、教育効果の高い授業内容を検討し、それらを、主体的に実践出来る生徒育成が課題である。	引き続き減単となった 5 年生の実技についてはどのように授業を展開していくべきか検討していきたい。 さらに運動における競争や協働を通じて、互いに協力し、公正に取り組む姿勢を養って行きたい。	B	B
技術	実践的・体験的な学習を通じ、知識と技術を習得させ、生活する能力と実践的な態度を育てる。1 年生では、情報に関する内容、2 年生では、加工分野のうち製図・木材加工を、3 年生では、エネルギー変換の分野で電気について、加工分野では金属などを扱っていく。	1 年生 1 学期 パソコン入門 2 学期 情報モラル、プログラミング入門 3 学期 プログラミングでクイズを作ろう 栽培学習（豆苗の育成方法） 2 年生 1 学期 製図学習 2 学期 木材の加工・木材の加工 2 3 学期 同上 3 年生 電気分野（エコキューブラジオの製作） 1 学期 夏休み 機械学習（からくりおもちゃの製作） 2 学期 金属の加工（金属板の加工、オリジナルキーホルダーの製作） 3 学期 金属の加工（鋳造）	長年使用してきた工具の点検、入れ替え （少しずつ実施中）	作品保管場所の確保に苦勞して いて、取り組むことが出来る教材に制限が出ている。今後改善されると、より幅広い学習内容に取り組めるので、検討していきたい。	A	A

家庭	中等部では生活に関わる基本的な知識・技術の習得をめざす。栄養や衣服の素材、管理のしかた、子供の成長と発達、住環境の整え方などについて学び、調理実習や被服製作実習など実践的な実習を行う。 高等部ではさらに資源やエネルギーの効率的な利用について考え、持続可能性を意識した生活ができることをめざす。また、子供や高齢者など様々な世代の人々についての理解を深めることを目指し、妊婦体験実習や高齢者疑似体験実習などを行う。学んだことを実生活へ生かせるように考えるグループワークなどを行う。	今年度も概ね予定通りに授業や実習などを実施できた。ただし２年生の被服製作実習は、昨年度に引き続き、実習期間のみ補助が入る形にとどまり、今後の課題となっている。生徒のためにも最低限、安全は確保できるようにしたい。実技指導のためにも TT を再導入したい。 家庭科では従来から SDGs を意識した教育を行ってきた。１、４年生では食料自給率や資源の有効活用、地産地消などを食生活分野と併せて積極的に扱っており、ゴール 2、6、7、9、10、11、12、13、14、15、17 に根ざした教育を行った。3、5 年生では消費生活を取り扱うことにより、特にゴール 12 のつくる責任・つかう責任について考え、また、5 年生のおもちゃ製作実習は家庭にある不要品を用いることにより、持続可能な社会作りに直結する総合的な取り組みとなっていた。高等部の授業ではジェンダーや働き方、格差や経済についてもグローバルな視点で扱い、ゴール 1、2、3、4、5、6、8、9、10、12、16、17 に根ざした教育を行った。5、6 年生では、妊婦体験実習・高齢者疑似体験実習により、他者への関心や理解、思いやりを育み、パートナーシップを身につけ、よりよい社会の構築に役立つ人材作りに貢献している。6 年生では住生活分野で、住み続けられるまちづくりについて考えさせる内容に加えて、今後起こりうる災害とその対策についてグループワークを中心として学習し、災害について実践的に考え、対策をしていくための態度を身につけさせた。 今年度は食器棚を改修することができ、施設面の改善もだいたい進められた。調理器具や製作実習用具の不足、老朽化が目立ってきたため、改善したい。	被服製作実習を行う２年生の授業の TT を復活させたい。この分野での TT は教育面・安全面ともに効果が絶大である。 １年生の調理実習でアレルギーを発症することが過去に何度かあった。事前に確認しているが、誤って皮膚についたり、自己判断で勝手に口にしたりということが起こるため、１年生の調理実習でも実習補助が必要である。 被服室前の掲示板が書道用に利用されているが、家庭科の実習授業中に掲示作業が行われることがあり、危険性を感じる。書道作品用の掲示板を別の場所に設けたうえで、ビニールカバーを外して被服室用に利用させていただきたい。 備品の不足、破損が目立ってきたので、新しく購入し直したい。	被服室が新設され、授業が行いやすくなった面もあるが、実習をするには狭く、アイロン作業は廊下で行わざるを得ないのが悩みである。 被服製作実習の TT は教育面・安全面ともに効果が絶大なので実施できる道を探りたい。実習期間だけは、特に安全性の確保と実技指導のためになんとしても必要である。 調理実習の食材調達への負担が大きく、ここ数年苦慮している。購入や支払いについては監理室や事務室の負担も大きいが、協力してくれる近くのスーパーを利用して、なんとかしていくしかないのだろうか。	A	A
	中等部２年生では、基本的なコンピュータの使い方(タイピング、文書作成、表計算、プレゼンテーションの資料作成)、クラウドを利用した課題確認・提出作業、プレゼンテーションなどを通して、発表のスキルの習得、表計算を用いてアンケート調査や世間のデータで、データの整理や分析を行う。3 年生では、プログラミング教材キット(SPIKE プライム)を利用したプログラミングを通して、センサーの仕組みや身の回りにあるプログラムによって制御されているものに興味を持たせた後、言語によるプログラミングにも取り組む。プログラミング体験時には、フローチャートを書くことで、順序・手順を考えながら作業を行う大切さを理解させる。 高等部４年生では、各自が企画から撮影、編集まで実施する CM 制作や、企画から、文章作成、写真撮影、編集、校正まで実施する雑誌記事制作を通して、物事を表現する手法の幅を広げるとともに、物事を発信する力、人に伝わるものの作成方法を身に付けさせる。さらに「学問のすすめ×AI」をテーマに AI に触れさせる。5 年生では、プログラミング作業を通じて、論理的思考を養い、そして情報のデジタル化、情報デザイン、知的財産、著作権、個人情報、ビッグデータなどをキーワードとしながら、情報化が社会に及ぼす影響について理解を深める。 情報モラルについては、中等部・高等部ともに状況や学齢に合わせて定期的に呼びかけ、考える機会を設ける。 クラウドの利用に関しては、中等部・高等部ともに積極的に利用する。	「目標と具体案」に記載した教科の授業を通して身に付けさせたい事柄については、概ね学年に応じたスキル知識が身につけていると感じている。クラウド環境の利用や授業で得た知識を、他教科、委員会活動、クラブ活動、学級活動等で生徒たちが、積極的に上手に利用することができていた。 中等部２年生全員が２週に１回のペースで取り組んでいる５分間文書入力サンプル文章に、SDGs の「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」を取り上げ、17 の目標を読む機会を設けた。	入学してくる生徒の実態に合わせたカリキュラムを考えながら授業を行っていきたい。	発展し続けている情報技術・情報社会の実情、入学してくる生徒たちの ICT 活用スキルの実態に合わせて、内容を常に変えていく必要がある。 校内で ICT 機器活用する環境(場所・施設・机・椅子など)にも目を向け、生徒が ICT 機器を用いやすい環境整備も行っていきたい。また、すでに導入済みの 3D プリンタや、今後導入予定のレーザーカッターなどデジタルファブリケーションの環境整備にも取り組みたい。	A	A

英語 (a)	Our overall aim is to graduate knowledgeable, responsible, confident and globally-minded communicators who are motivated to continue their English-learning journeys and to make a meaningful contribution to society. Specific aims for Writing and Grammar: Students will become proficient writers of both academic and creative essays, culminating in a 2000-word research paper written in the 6th Year. Particular attention will be paid to academic writing conventions such as citations, referencing and the need to avoid plagiarism. Specific aims for Reading and Vocabulary: Students will improve their vocabulary knowledge and refine their reading skills by studying a variety of novels and non-fiction works typically read by students of the same age in English-speaking countries. Sixth year students will study Shakespeare. Specific aims for Speaking and Listening: Students will become confident English speakers. They will be able to make professional presentations and participate in debates on increasingly complex subjects. Sixth year students will participate in the Model United Nations, deepening their understanding of international issues.	ICT skills acquired by both teachers and students during the Covid-19 pandemic continue to be utilized in many English courses. Some examples include: 1) Sending messages and setting tasks for individual students who have had to stay at home due to Covid-19 2) Asking students to upload recordings of speeches done at home during longer holiday periods 3) Using Google Docs to facilitate the editing and redrafting of essays Content and Language Integrated Learning (CLIL) has always been a characteristic of the Alpha English curriculum at SFC, and as one of our central aims is to graduate globally-minded, responsible students, there has always been a focus on studying global issues in a way that encourages our students to think critically about the issues that they will face as members of Society 5.0. In recent years, the SDGs have proved to be a useful framework for this purpose, and the following are examples of work done by Alpha students that focuses on the SDGs: 1) Year 1 SLWG. Speech topics focused on Goal 3 (Good Health and Well-Being), 4 (Quality of Education) and 13 (Climate Action). In addition, several TED Talks that focused on topics related to the SDGs were studied, e.g. the talk by UN Patron of the Oceans, Lewis Pugh, which focused on Goal 14 (Life Below Water). 2) Year 3 RV. Goals 16 (Peace, Justice and Strong Institutions), 5 (Gender Equality) 4 (Quality of Education) and 8 (Decent Work & Economic Growth) were addressed in the study of the novel <i>To Kill a Mockingbird</i> by Harper Lee. 3)Year 3 Alpha WG. Students write an Informative Essay focused on SDGs. 4) Year 4 SL. Students gave persuasive speeches in which they had to choose a problem that fell under the SDGs, propose a solution, and persuade their audience to take action on it. 5) Year 4 RV. Goals 16 (Peace Justice and Strong Institutions) were frequently discussed during our study of <i>Fahrenheit 451</i> by Ray Bradbury. 6) Year 6 MUN. Students play the role of UN ambassadors for the duration of the course. The SDGs are studied in detail, and students make presentations focusing on which of the Goals are most relevant to the countries they are representing. We also discuss the SDGs in the context of Japan, and students are asked to write short essays in which they discuss which Goals they feel Japan is doing well and not so well on. Finally, the course concludes with an in-school conference in which all members of Year 6 Alpha work together to write a mock UN resolution on a global topic of concern. This year the topic was <i>Universal Secondary Education for All</i>, and Goal 4 (Quality of Education) was a major focus of the day. 7) Year 6 Discussion and Debate elective class. Each debate is based on a theme, many of which are directly linked to the SDGs, with debaters often making reference to the SDGs in order to strengthen their arguments. Some examples include: Goal 1 (No Poverty) <i>THBT the government should give more medical and financial support to the elderly.</i> Goal 5 (Gender Equality) <i>THW make companies hire as many women as men.</i> Goal 7 (Affordable and Clean Energy) <i>THBT all cars should be changed to electric cars.</i> As we find every year, the majority of graduating Alpha students have reached the desired level of English. This is confirmed by the results of external exams such as TOEFL and contests such as the Keio Academic Writing Contest and a variety of speech contests. In recent years, a growing number of students are enrolling in the PEARL, Double Degree and GIGA programs at Keio University, enabling them to further develop their foreign language skills.	The Alpha curriculum is under continuous review and we are constantly looking for new materials to enrich the learning experience of our students. Particular areas of focus for 2024-25 will be: a) To focus on grammatical accuracy in the written work of the weaker Alpha students. b) To ensure that we continue to make the best use of ICT and online learning platforms to complement what takes place in school, whilst being aware of the challenges posed by technology "assisting" students with homework. c) To further raise awareness of the real-world issues that our students will face in the future.	The arrival of the first cohort of Keio Yokohama Shotobu students in 2019 brought with it a number of challenges and opportunities for the English department. We now feel we have successfully implemented a challenging and coherent curriculum at the junior high level that addresses the needs of our highly diverse student intake. The first cohort of Shotobu students moved up to senior high school in April 2022, so our medium-term aim is to ensure that an equally challenging and coherent curriculum is developed to suit their needs. To this end, Year 4 WG students completed a course survey in March 2023, the results of which confirmed that the course content follows on well from junior high school courses and addresses student needs well. The development of AI presents a number of challenges for English education. Students will be strongly dissuaded from using AI and translation applications for most in-class and homework tasks. However, it is acknowledged that AI will increasingly become part of students' lives, and ways to constructively incorporate the technology into the English curriculum will be explored.	A	A

英語 (β・γ)	中等部、高等部共に英語はコミュニケーションの道具であるという基本理念に基づき、英語での情報を理解する Receptive な言語能力と、また英語で自分の考えを発信していく Productive な言語能力をバランス良く育て、英語を実践的に使うことができる人を育てることを目標としている。6 年修了時に英検準 Ⅰ 級、CEFR BⅠ レベルの言語運用能力に到達することを目指す。	中等部では従来通り、副教材である New Treasure を用いて基礎的な英文法の学習を進めた。英作文ができることを目標に基本文の暗唱や文法問題のドリルを繰り返し行うことによって、基礎的な英語力がしっかり身につくよう、多様なトレーニングタスクを実施した。また、身近な様々なトピックに関して 30～40 語のオリジナルの英文を書けるようにトレーニングした。Speaking/Listening の授業ではネイティブスピーカーの教員が、日常の様々な場面における英語表現をコミュニケーションに教えている。Ⅰ年生のネイティブスピーカーの教員へのインタビュータスク、2・3 年生の英語圏からの留学生へのプレゼンテーションなど、生徒に多様なタスクを経験させた。	日々の授業に関しては、日本人の教員と Native の教員が引き続き密に連携を取り、必要に応じてお互いに授業内容を補い合って、学習内容の更なる定着を図っていく必要がある。	家庭学習時間が不足している生徒への課題の出し方、予習復習の仕方、self-study habit をつけさせる工夫が必要だと思われる。		
	中等部では、3 年間で文科省が定める文法事項に加えて、副教材である New Treasure で扱われている発展的な文法事項の学習も進め、さらに、学習した文法事項を発展的に用いた様々な実用的表現、基本的な語彙を身につけることを目標とする。3 年次には偉人に関するグループプロジェクトや、身近な話題に関するプレゼンテーションを経験する。	高等部ではより多様な状況における日常会話での英語のみならず、よりフォーマルでアカデミックな英語に触れ、Listening や Reading 能力の向上させることができた。また同時に Listening や Reading のタスクを通して得た情報に基づいてリテリングやスピーチを行ったり、教科書に載っているテーマ以外にも数多くのテーマについてプレゼンテーションを行った。	中等部 3 年での β、γ の合流に関しては、大半の生徒にとっては特に問題が生じないことがわかったが、成績下位者に対するフォローアップの方法とタイミングを考えていく必要がある。また、高等部の授業に準備するためにも、「中学 3 年間の総まとめ」と「Self-study habit」を意識して指導していく。	副教材として使用している New Treasure シリーズを、Ⅰ～4 年で、より効果的に教材を活用する方法を引き続き考えていく必要がある。		
	中等部入学時の多岐に渡る学習歴及び習熟度に応じてより効果的な授業を行うために、Ⅰ年、2 年では 2 クラス合同 4 分割 (αⅠクラス、β2 クラス、γⅠクラス) の授業展開とする。3 年では 2 クラス合同 3 分割 (αⅠクラス、β2 クラス) の授業展開とする。 高等部では英語で情報を発信していくことにさらに重点を置き、4 年で Speech、5 年で Speech、6 年で Discussion や Presentation を実施している。英語のニュースを教材として扱うことで、できるだけ実践的な英語力を高められるように工夫している。英語で情報を読み取り、それらを土台として自分の意見を書いていく Academic Writing の能力を高める取り組みも行っている。	Reading の授業では、教科書のみならず、関連トピックの新聞記事や映像教材を使用し、一般的な教科書には出てこないような実用的な英語表現に触れたり、語彙力を強化し、社会問題に関する意識づけをしたりすることができた。また、5, 6 年で行われる Academic Writing では、英語で他者の意見の要約を書く力や、他者の意見を取り入れながら、自分の意見を説得力ある形で表現していく力を養うことができた。 英検や TOEFL などの資格・運用能力試験に特化した授業を行っているわけではないが、今年度 5 年生で Writing では英検準 Ⅰ 級の Essay フォーマットを授業で扱う試みをした。ここ数年は、β の生徒も卒業時までには準 Ⅰ 級を取得する生徒の割合は 30%を超えるまでになっている。 SDGs を見据えた取り組みとしては、そもそも教科書の題材に SDGs に関するものが多く、生徒は常に SDGs を意識して英語学習を進めていると言える。 例 Ⅰ-6 年 β (Reading & Vocabulary) :ジョージ・オーウェルの「1984」を読み、Goal 16 (Peace, Justice, Strong Institutions) もに関連する「ディストピア」や未来の社会について話し合った。 例 2-6 年 I 類 β (Listening & Speaking) : SDGs “Ethical Choice”に関わるテーマについての発表を行なった。	高等部では既習の語彙、文法事項を使って Speech、Debate、Discussion、Presentation、Academic writing などを行い、自分の意見を発信していく能力を高めることももちろん大切だが、意味を優先するあまりに生じる文法的誤りを、見過ごしたままにせず、文法的正確さを高めていくための取り組みを、本格的に行うこともまた重要である。前述の通り「英語はコミュニケーションの手段である」という基本理念に基づくが、「通じればいい」ではなく、大学、社会人になった時に高いレベルでのコミュニケーション能力を求められる本校生徒には、正確さ、より知的な英語運用能力を鍛えていきたい。 ICT やオンライン学習プラットフォームは今後も活用していく。しかし、昨年より生徒が課題作成時にテクノロジーに依存する傾向が見え始めた。将来そうしたテクノロジーを有効に活用できるようになるためにも、中等教育段階での学習は、「ツールに頼って出来のよいものを作成する」ことがゴールではなく、「自分の頭で考え、間違いをしながら、言語運用能力を高めていく」ことを教える側と学ぶ側の共通認識として授業を展開していく。	高等部の生徒については、ITP-TOEFL を毎年実施しているが、国際基準の英語能力テストである iBT TOEFL は、試験内容が ITP-TOEFL とは大きく異なっている。将来的には iBT TOEFL が要求する統合的言語スキルをさらに高めることができるように、高等部の英語カリキュラムを再構築していくことが求められる。 New Treasure を使い始めて 6 年目という節目を迎えたので、中等部各学年の Can-do リストを作成し、SFC 独自の新たなカリキュラムと評価基準を打ち出す必要がある。	A	A

2024 年度学校評価（慶應義塾湘南藤沢中・高等部）

2. 各委員会における自己評価

評価方法	当該年度の始業までに、運営計画と、3～5項目の目標設定を行い、資料を作成する。 年度末に計画の実施状況と、各目標項目の達成度について各委員会の構成教員が、A～Dの4段階で評価する。						
総合評価 規定	目標項目における評価点の平均点を算出し、以下の基準でアルファベット表記をする。 A 達成できた（80%～100%）／B ある程度達成できた（60%～79%）／C あまり達成できなかった（40%～59%）／D 達成できなかった（～39%）						
委員会名	目標	具体案	結果	次年度への課題と対策案	中期的な課題	前回 評価	今回 評価
生徒係	1. 気品の泉源・知徳の模範となる塾生の育成 2. 自宅外通学者の生活指導 3. 防災意識の向上・災害時に生徒自身が的確に対応できる知識の習得 4. 交通安全意識の向上 5. 防犯意識の向上・情報機器・スマートフォンの適切な活用法の習得 6. 生徒の成長に合わせた保健講演会の実施 7. 生徒の学校生活全般にわたる支援	1. 生徒の公共交通機関利用時のマナー・規範意識を向上させる。 2. 一人暮らしの会を実施し、各寮との連携をはかる。 3. 防災訓練を実施（帰宅方面別の設定／地震火災を想定した訓練）する。 4. 道徳・HRでの交通法規に関する周知、自転車通学者への個別の呼びかけを行う。 5. 道徳・HRの時間を利用し、防犯教育や学年に応じたスマートフォン利用の仕方を徹底させる。 6. 保健講演会を実施（精神保健・スポーツ障害など）する。 7. 私物管理の徹底をはかる。	1. 教員が年間複数回、湘南台駅および大学本館前にてバス乗車指導に取り組んだ。乗車列に関する苦情はほとんどないが、乗車マナーおよび湘南台駅で広がって歩くことに対する苦情は多く寄せられている。 2. 生活上の具体的な問題点や解決法などを上級生から下級生に情報提供する場を設けることができた。 3. 帰宅方面別グループの確認を行った。また、防災訓練では「グラウンドへの避難ではなく校舎内に留まる」訓練を行った。 4. 道路交通法改正に伴い、HRで全体に、自転車通学者に対する交通ルールの遵守およびヘルメット着用について周知した。 5. 帰宅方面別グループの確認は防犯教育にもつながるものであった。スマートフォンやPCの利用については、中等部生が年々上手に扱えるようになってきている。 6. 校医・カウンセラーなどによる講演会を複数回、実施した。 7. 落とし物の展示を学期に1回のペースで実施した。生徒会の協力のもと行うこともできた。	1. 乗車マナー、待機時のマナーを周知し、円滑なバス通学になるよう検討を続ける。 2. 寮・学校間の連携を密にし、寮からの情報を生徒係・担任団と共有する。次年度も一人暮らしの会を実施する。 3. 次年度も帰宅方面別グループ分け、災害時を想定した防災訓練を実施する。防災訓練ではより実践的な内容に更新をしていく。 4. 自転車通学者の交通ルール順守を徹底し、違反者をゼロとする。 5. 必要に応じて警察にも協力を仰ぎ防犯教育を実施していく。高等部生もスマートフォンを上手に活用できるように校内での利用について見直しを重ねる。 6. 次年度も様々な形での講演会を検討したい。 7. 次年度も生徒会と連携し、持ち主が現れなかった落とし物の処理方法を検討していく。	1. 生徒がキャンパスと駅の間を快適に通学できるような輸送システムを確立する。 2. 生徒の精神衛生面における支援のため、学校と家庭がより連携し生徒を見守る体制づくりを模索する。 3. より実践的な防災訓練の確立、および必要な防災備品を整理、準備する。	B	B
いじめ 防止対策 推進室	1. いじめの未然防止のための措置を講じる 2. いじめの早期発見のための措置を講じる 3. いじめの早期解決のための措置を講じる	1. 学校生活、友人関係にまつわる悩みなどのカウンセリング件数の増加に伴い、カウンセラーの相談時間枠の増加に加え、ステイホーム中から現在においても、電話やweb会議システムを用いた遠隔カウンセリングなどを通じて、防止のための対策を実施する。 2. 学級活動、生徒会活動、道徳の授業やクラブ活動の場において、いじめについて生徒が主体的に考え行動する機会を設けるように努め、道徳性を育む取り組みを進める。 3. 教職員は日常的にいじめの問題に触れ、「いじめは絶対に許されない行為である」という雰囲気を醸成するように努めるとともに、「いじめはどの学校でも、どの生徒にも起こりうる問題である」という認識の下、生徒の行動に目を配り、生徒と	1. 今年度もいじめを疑わせる事案は散見された。引き続き最大限の防止策を講じるとともに、いじめの兆候を早期にキャッチできるよう努めていく。 2. 一貫校いじめ問題連絡会にて「いじめの重大事態の調査に関するガイドラインの改訂」について確認が行われた。 3. 生徒がいじめに関する相談をwebを通じて行えるよう「いじめ相談フォーム」を開設し、HRで周知した。	1. 中高併せて36クラスと学校規模は大きいですが、一人一人の生徒の様子を丁寧に観察する姿勢を堅持するとともに、いじめ事案が発生しなかったことに安心感を抱くことなく、緊張感を持続していくよう、教員集団に促していく。 2. 一貫校いじめ問題連絡会で得られた他校の取り組みを参考にして、本校の取り組みを見直していく。	いじめの形態は社会背景に影響を受けて変化することから、教職員が継続的に研修を行なう制度作りが求められる。また、教職員のコミュニケーションをより緊密にとれる体制を整えていく必要があると考えている。	A	A

		の信頼関係の構築に努める。また、個人面談を実施するなど、生徒がいじめを訴えやすい体制を整える。 4. 表面化しにくいインターネット上のいじめへの対応策として、情報モラルを身に付けさせる指導を継続的に行うと共に、保護者と緊密に連携・協力し、双方で指導を行う。 5. 生徒がいじめを受けていると思われるときは、直ちに本推進室の会議を緊急開催して情報を共有するとともに対策を講じることにする。いじめを受けた生徒を守り、安心・安全な学校生活を送ることができるよう必要な支援を行う。いじめを受けた側、行なった側双方の生徒および保護者に対し、事実関係を速やかに伝え、適切な対応が行えるよう、保護者の協力を求めると共に、継続的な支援を行う。 6. 一貫教育校いじめ問題連絡会に出席し、塾内一貫校との情報交換・意見交換を通じ、いじめの問題に対して、適切および迅速に取り組む体制を整える。					
文化祭	1. 文化祭の運営、管理をはじめ、規則の取り決め、出	1. 学校開催を想定して準備を開始する。システムの	1. 2024 年度は、校舎を会場とした文化祭を開催し	1. コロナ以前の文化祭の形態に戻すことが出来た。来	1. 本校文化祭の目標を達成すべく、状況に応じた文	B	B

	展企画の活動の統括を行う 2. クラブ、クラス、有志、教員による各出展企画の、調整および支援を行う 3. 文化祭作業および文化祭を通じ、生徒の文化活動の活性化と学内交流の深まりを目指す 4. 生徒、教員からなる企画を行うことで、本校の校風、活動状況を内外へ紹介する 5. 「文化の薫り」を基盤とした統一性のあるものを創り上げ、本校生徒や来場者に我が校の「薫り」を感じてもらうことを目指す 6. 安全と省資源、節電、ゴミの減量に対する配慮を心がける	活用を検討し文化祭の充実と効率化を図る。 2. 感 染 症 の 状 況 に 応 じ 対 策 を 取 る 。 ・ 入場者数の調整、教室内等の換気を行う。必要に応じ対人距離やマスクの着用や消毒などの対策を昂じる。 3. コロナ感染症以前の文化祭の形態に戻す。外企画の設置、第一体育館の飲食スペースの設置を目指す。 4. 企画の多様化を図る。外企画の追加。企画の具体的な内容をしめすとともに、過去の文化祭の記録写真を閲覧できるようにし、企画立案時の発想サポート、校舎使用上の技術継承を目指す。 5. 生徒の文化活動を活性化すべく、アカデミックな活動を行う有志企画の出展を補佐する。 6. 文化祭担当教員と実行委員生徒は綿密な連携をとり、担当教員はこれまでの実行委員会のノウハウの伝達を、生徒はより活性化および合理化したシステムの構築を行う。 7. 文化祭ウェブサイトとSNSを活用し告知を行う。	た。全学年全クラス・文連クラブ・複数の教員企画・有志企画が出展した。 2. 来 場 者 数 11/16（土）来場者数：2,369名 11/17（日）来場者数：5,482名 入場者総数：7,851名 3. 企 画 に つ い て ・例年通り、15分以内に収まる企画とした。 ・屋外の企画を設けた(コロナ以前の形)雨天時の対応など課題を多く残したが、集客も多く生徒の満足度は高かった。 4. 飲食エリアについて スムーズな運営が出来た。また出店店舗からは十分な集客が得られ満足されていた。エリアの拡張など来年度の課題としたい。 5. 文 化 祭 Web ペ ー ジ に つ い て ・文化祭の告知としてwebおよびSNSを利用し、各企画の簡単な紹介および準備期間の写真や動画を配信した。公開期間は web・SNS 共に、2024年11月末日までとした。	年度からは各所効率化を図りながら、新たな文化祭の形を模索していく。 2. 企画内容の多様化を図るため、具体的なアドバイスが出来るよう心がける。 3. 企画に関わるメディアや表現媒体の再検討を行う。 4. これまでの経験を引き継いでいくことを重点事項としながら、企画等の内容充実を図るため適切な助言をしていく。 5. 南校舎への案内を中心に校内案内を充実させる。 6. 本校文化祭が生徒のより一層の文化活動活性化を推進することを目指す。 7. ゴミの分別の徹底と削減を目指す。 8. 教室の利用希望が多く、教室がひっ迫している。調整及び教室利用の検討が必要。 9. 生徒の食事会場を大学構内に設けている。校内の可能性を検討したい。	化祭形態を考案する。 2. 文化祭が、全校生徒の持つ創造力・表現力の素地へと働きかける機会となることを目標に、実行委員会の活動を補佐する。		
教務	1. 授業や試験、学期末の特別日程などが円滑に行われるように事務処理を行う 2. カリキュラムに基づき、教科選択が適正に行われるように環境・手続きを整備し、実施する 3. 生徒の出欠席の状況を管理する	1. 授業や試験の時間割・使用教室一覧などを作成する。 2. 次年度の6年生選択科目・5年生第2外国語の希望調査を行なう。 3. 次年度の6年生選択科目・第2外国語の本調査を行う。 4. 事務室と連携して、電子出席簿の運用を行う。 5. 教室の予約表や備品の管理を行なう。	1. 多目的B～Fの呼び方が101～105と定着し、高等部、中等部双方からの移動が容易になった。 2. 第2外国語は9月予備調査、1月本調査を実施した。 3. 雨天等でのバス遅延が多く、相変わらず生徒の登校時の負担が多い。 4. 教室のWeb予約システムは順調に稼働している。 5. バスの遅延情報が開示されるタイミングに合わせて、出欠集計の締め切り日に余裕を持たせた。	1. 南校舎の4年生は、机と椅子が相変わらず既存棟から持ち出したもののままである。 体格に合ったものへの交換が望まれる。 2. 4年生に対しての第2外国語のガイダンスが引き続き手薄である。希望調査の前に、説明会の企画が課題である。	新カリキュラム（5年生からの第2外国語履修）が4年目となり、初めての海外研修旅行も行われた。選択前に出口を紹介できるような工夫を提案していきたい。 教室利用や試験実施、時間割作成などが円滑に運用できるように継続して努める。	A	A
コンピュータ	1. 教員と生徒が利用するコンピュータ、タブレットとその周辺機器の管理及び整備 2. ネットワーク機器の管理及び整備 3. BYAD(中等部)の実施と次年度の機種選定、BYOD(高等部)の実施と次年度のスペック検討	1. 授業や校務のオンライン化に必要なサービスを選定、契約するとともに、その利用方法を教員・生徒に周知する。 2. 教員用、生徒用パソコンのリプレースに関して、機種選定し、スケジュール通りに導入、置き換え作業を行い、9月以降の授業で利用開始できるようにする。	1. 例年通り、ネットワークを安定して運用できた。在宅勤務や在宅学習の基盤として、ネットワークを活用できた。 2. セキュリティ上の重大インシデントを発生させることがなかった。 3. BYADの授業内設定支援をし、BYAD、BYODの授業中利用を促進させることができた。	物価上昇に伴い、情報機器の価格や、委託業者の人件費も上昇している。必要な情報機器の絞り込み、BYAD・BYOD利用のさらなる促進や、委託業者の業務を見直すことで、情報関連予算の膨張を抑える。	学校が生徒・教職員に提供するハードウェア、ソフトウェア、クラウドサービスの種類が、ここ数年膨らむ一方であるため、整理する。これにより得られる予算・人員面の余裕を、新しいサービスの提供に振り向ける。	A	B

		3. KIC/CSIRT 等の塾内各部門と連携ながら、情報セキュリティに関わる最新情報を常に収集し、必要に応じて、技術的な対策を講じる。	4. I T 機器やクラウドサービスが世界的に値上がりしている中、予算内で全てのリブレース計画を実施できず、一部を次年度以降に先送りした。				
生徒会	1. 生徒の自治組織としての意識を持たせ、それに見合う活動を行う 2. 生徒の身の丈にあった活動になるように指導する	1.本来のやるべき活動をしっかりと行い、本部役員としての責務を果たす。	1. 新入生歓迎会を昨年と同様に実施することができた。 2. 「七夕祭」の企画実施。予算が削減されたため、縁日企画は行わず、笹飾りとクッキング部による抹茶プリン配布のみを行った。 3. 応援指導委員会主導による野球応援を実施した。昨年に続き、本校生徒・保護者にも来場してもらい、応援を行うことができた。 4. 文化祭企画「生徒会相談室」「応援実演」を実施した。 5. 「正月祭」の企画実施。おみくじ、羽根つき大会、おしるこの無料配布などを実施した。どの企画も盛況で生徒は楽しんでいた。 6. 「卒業生を送る会」の企画実施。θ 館（1 部）、150 番教室で映像視聴兼色紙サイン会（2 部）の 2 部構成とした。2 部では、コロナ禍で一度も合唱コンクールができなかった 6 年生全員で合唱を行った。 7. 昨年度から取り組んできた女子トイレ生理用品設置お試し運用を行った。 8. 校内の忘れ物削減のための呼びかけを行った。 9. 放送室の明るさ改善のために LED 投光器を購入し、放送円滑化のためにワイヤレスハンドマイクを購入した。	引き続き、本部役員と生徒とのコミュニケーションを活発にし、生徒全体の自治意識を高めていくことが課題である。イベントの企画、実施に終始し、代表委員会さえもほとんど実施されなかった。	一般生徒からの声を吸い上げ、改革していこうという意識は感じられるが、企画書や要望書はとても安易で、動きも遅い。学校が置かれている現状、環境を認識し、議論した上で、問題に取り組み活動することが課題である。	A	A
図書	生徒たちにとってより利用しやすい図書室を司書の方々と協力して運営する	1. 図書委員の生徒を中心に、図書室での作業・お勧め図書の紹介などを行ない、開かれた図書室作りをしていく。 2. 図書室ニュースや図書室内の掲示を利用して、生徒達の図書室利用をうながしていく。	1. 生徒の興味のありそうな本、司書・教員の視点での読んでほしい本などを積極的に選定し、それぞれ推薦文を書いてもらい、図書室ニュースに掲載した。 2. 生徒の図書委員会ではおすすめの図書の紹介、スタンプラリーの企画・カードの作成など、趣向を凝らした活動を行なった。文化祭でもおすすめの図書の紹介をするコーナーを作った。	1. より多くの生徒に利用してもらえる図書室作りを目指すしていく。 2. 大学メディアセンターの利用マナーを徹底していく。 3. 図書室ニュースの定期的な発行を目指すしていく。	1. 増え続ける蔵書の問題を解決し、書籍だけでなく、映像資料のさらなる充実をはかっていきたい。学年間の利用頻度の差を縮めていく方法を考えていきたい。 2. 大学メディアセンターの利用が減ってきているので、6 年生の論文実習などでの利用数が増えるよう啓蒙活動をしていきたい。	A	B

論文実習	学術論文作成に必要な以下の点を理解する 1. 先行研究が集められ、そこに述べられている見解や主張が整理されていること 2. 整理した先行研究を「批判的に」見ること 3. 他者の意見を尊重し、自他を明確に区別する方法を学ぶこと 4. 論文としての形式や体裁を知る	1. 論文実習 1・論文実習 2、各 2 時間ずつ行う。 ①論文実習 1 (I 類 HR クラス単位でスタッフによる授業を行う) ・4 月中は教科書『論文事始』をもとに講義を行い、論文を作成するための姿勢を学ぶ。 ・1 学期・2 学期で各 1 回するプレゼンテーションを通じて、「問い」と「仮説」、それを結びつける「アプローチ」の論理性、一貫性を確認する。 ②論文実習 2(担当者別のクラス。授業は 2 クラス合同で行う) ・資料収集、プレゼンテーションのレジュメ確認、執筆にあたってのアドバイスなどの個別指導を行う。 ・下書きの査読を通じて、剽窃や形式のチェックを行う。 ・提出後に作成したパワーポイントを用いてプレゼンテーションを行う。 2. 剽窃の問題をはじめとする研究倫理について、全体への講義の際に確認する。特に、生成 AI の取り扱いについても、その注意点を確認する。	論文実習 1 例年通りに行うことができた。 論文実習 2 論文作成作業・担当者による面談や指導を授業時間内で行うことができ、生徒は作業時間が確保され、教員もより綿密な指導を行えている。 テーマに共通点のある生徒が集まっているので、お互いへのアドバイスなどもできた。 早稲田大学本庄高等学院との交流 今年度も相互に生徒を派遣して発表、交流する機会を持つことができた。	1. 評価方法の再検討 2. 次のテキスト改訂を視野に入れ、掲載する生徒の論文例や新たな説明事項などの構想を立てる) 3. 他校の取り組みも参考にして、改善すべき点を見つけ、よりよい「論文実習」を目指していく。	「論文」として目指すゴール像を再考する必要がある。理想的な水準と最低限全員が達成したい水準を整理し、それに合わせた評価の仕組みを再構築できるとよい。また、現在は、手法としてフィールドワークやアンケート調査は認められていないが、今後これらを取り入れるかどうか検討すべき課題である。カリキュラム全体にかかわる問題としては、Ⅱ類も含めた全員に研究を課すか、4・5 年時からスタートすることが可能か(例えば論文実習基礎)などについても議論が必要である。	A	A
国際交流	1. 既存の短期プログラムのスムーズな運営。 2. オーストラリアプログラムのホームステイにおける新しい規定にしっかりと対応することで、プログラムを存続させる。 3. 英国 Bury プログラムに代わる交流相手校を探す。	1. オーストラリアプログラムにおいて、ホームステイをする家庭を教員が訪問する際、事前にチェックリストを渡して協力を求め、丁寧に説明をする。 2. 英国で、新たな交流校候補校をリストアップし、有力候補校を実際に訪問して、交流開始に向けた話し合いを行う。	1. 厳しい規定に関わらず、オーストラリアプログラムのホストをする各家庭は非常に協力的で、今後に向けて大きな推進力となった。 2. 英国において新たな交流校を探すという計画は実現には至っていないが、既存の短期プログラムの交流相手である Stephen Perse Foundation から 1 名 1 年間の英国留学の提案を受けた。	1. Perse の提案の 2026 年度の実現に向けて、時期、金銭面、寮に入っている間の長期休み中の滞在先など、現時点で上げられている点の検討を始める。 2. 1.と同時に、コロナ禍を経て廃止したプログラムに代わる交流先の検討を続ける。	1. 男子の応募者が減ってきているので、原因を探り、対応策を検討したい。 2. 受け入れの必要な交換留学に対する応募者が減ってきているため、家庭の負担感を軽減できるようなプログラムの工夫をしたい。	B	B
施設	1. 安全を第一として、基本的な施設・設備の充実を常に念頭に置き、計画、整備を実行していく 2. 引き続き、施設・設備全体の経年による改修事案について、迅速に対応していく	1. 第 3 体育館の雨漏りについて、経過観察をする。 2. 新グランドの獲得並びに工事の事業を進める。	1. 第 3 体育館の雨漏り経過観察については、特に問題なく経過している。 2. 学校外の徒歩 10 分圏内に新しく芹沢球技場が 6 月に完成し、主にソフトボール部の活動場所として使用を始めた。	1. 第 3 体育館の雨漏りについては、引き続き経過観察し、問題がある場合は、関係部署と連携し、迅速に対応していく。 2. 南校舎ロッカーの鍵をダイヤルロックに変更 3. その他、引き続き、経年劣化による備品の交換や、校内全施設における改修箇所の集約と改修計画および工事の実施。	1. 既存の施設も 30 年を経過し老朽化が進行している。中高、大学管財部、三田管財部など関係部署とも連携をとりながら、優先順位をつけて計画性をもって対応していきたい。 2. 6 学年すべてで 6 クラス揃ったが、もともと教室数が潤沢ではないうえ、カリキュラムが多様化されていく中で、新棟建設、増設等も計画していきたい。 3. 気候変動に伴い、学習環境が過酷になることが予想されるため、一年を通じて快適な環境で学習活動ができるよう空調を整える。 4. 屋上に太陽光パネルを設置するなどして、極力活動に必要な全ての電力を学校内でまかなえるようにする。	A	A
BLS	1. 救助の実践を通して、緊急事態の判断、危機管理、生命の尊厳、市民の義務を根付かせる 2. 3 年以内の再履修で実行能力の低下を防ぐ 3. ボランティア精神の育成 4. 教職員の受講率の向上	1. 指導員の指示に従い技術習得に励む。 2. 講習後、慶應 BLS 教育の取り組みについて説明にあわせ、校舎内に設置してある AED の場所を確認する。	藤沢市消防局、藤沢市救急救命普及推進会の協力もあり、学年全体が第 3 体育館に一堂に会し、実技を実施することができた。ダミーやトレーニング用 AED 等の機材も充実しており、生徒一人ひとりが時間をかけて実技に臨むことができた。教職員への受講アナウンスが出来なかった。実施時期に関して、7 月に他での講習会が集中しており、藤沢市消防局の予約をとることが出来なかった。	1. 感染症対策を十分に考慮し、一人でも多くの生徒が実技を受けられるようにしたい。 2. 教職員の受講数を増やすため、学校行事作成の際、教員が受講可能な日程に可能な限り設定をしたい。 3. 実施時期に関して、可能であれば夏季休暇前の 7 月に実施できるように計画したい。	この活動は、続けていくことに意義があり、塾生塾員誰もが、手をさしのべられる環境を目指す。	B	B
年会誌	年会誌発行の期日の円滑化、及び正確さを向上させる	各担当部署からの原稿について、進捗の確認・とりまとめを行う。	実施できた行事については積極的に記録として残すようにした。	締切の遵守や提出された記事の内容等、依然として不備が見られることも散発するところである。引き続き、丁	生徒の探究的な取り組みによる成果物についてより充実した記録がなされていることを目指す。	B	B

		・行事ごとに原稿の依頼をする ・校正は年会誌担任のみならず、各クラス担任・クラブ顧問にも依頼する		寧な確認、呼びかけを実施する。			
クラブ運営	生徒が安全かつ有意義にクラブ活動ができるよう、環境および制度を整備する	1. 各活動場所における危険箇所を調査し、安全に活動できる活動環境を整備する。 2. 熱中症予防などの安全対策を講じる。 3. 安全でスムーズなクラブ紹介を実施する。 4. 監督・コーチへの本校クラブ事情への理解を促し、より一層の協力を得る。	1. 前年度に続き、危険箇所を調査したが、備品の整備とグラウンド使用の過密状態による危険性が指摘された。備品の整備については、ほぼ対応できた。 また、グラウンドについても、芹沢球技場の使用が始まったため、第1グラウンドの過密状況が緩和された。 2. 主将主務のみならず、全生徒に向けて、熱中症対策ビデオを視聴させた。炎天下での部活動の制限などの対策を実施した結果、熱中症での病院搬送は、出なかった。 3. クラブ紹介パンフレット、ポスター掲示、各クラブの紹介動画(学年ごとに適宜視聴)によりクラブ紹介等実施した。また、希望があった場合、中庭にて部活動の実演を行った。 4. 9月に「監督・コーチの会」を実施し、資料の配布と説明を実施した。	1. 来年度以降も、施設不足解消に向けた努力は引き続き行う必要がある。特にグラウンドは厳しい状況である。 2. 数年来の課題である、教員の負担軽減を目的としたペーパーレス化だが、今年度は、あまり検討ができなかった。クラブ活動・遠征等許可願や公欠届などをどうするかについては検討を継続したい。 3. 夏季の運動部の活動については、今後も検討したい。昼間の時間帯は、ほぼ毎日、暑さ指数が危険になる。競技ごとの特性もあるので、一律のルールを決めることは困難だが、安全を最優先した環境をどのようにつくるかを考えたい。	1. 安全性を高める対策、特に夏季の運動部の活動については、検討と改善を継続する。 2. 生徒の活動に影響がないように教員負担を軽減する。義塾の「臨時職員制度」を有効活用し普及をより促進したい。 3. 電子署名を利用することで、紙の書類を大幅に減らす事を検討すべきである。 4. 活動場所の安全問題について、最も深刻な問題は、グラウンドの過密利用についてである。引き続き、外部施設の確保について強く要望をしていく。	A	A
広報	本校の広報に関わる業務の改良を目指して実施計画・企画・実施・評価・報告をする	1. 外部団体主催の説明会へ参加する。 2. 学校主催の見学会のスムーズな運営を行う。 3. 学校紹介には以下のものを有効に活用する。 ・学校案内リーフレット ・再構成版 Web サイト（引き続き改良に努める） ・学校紹介ビデオリニューアル版 4. 昨年度（2023 年度）に公募・審査をした、生徒による学校紹介動画の今年度から活用する。	1. 4/29（祝） 神奈川私立中学相談会 7/6（土） JOBA「学校フェア」（オンライン） 7/27（土） 早稲田アカデミー・首都圏模試センター共催（海外子女教育振興財団協力）帰国生対象学校説明会・個別相談会 2. オンライン開催（一定期間視聴可能なオンデマンド配信）と、オンライン併用の対面開催（mirai compass による事前申し込み・定員制の校舎見学会）を組み合わせ、以下の日程（すべて150 番教室）で実施した。また昨年までは生徒による学校紹介は録画を上映していたが、今年度はコロナ前の様に、生徒に生で学校生活の紹介を発表してもらった。 7/13(土) 中帰国・高午後 7/27(土) 中一般・高終日 9/14(土) 中のみ終日 3. 見学会参加者に対し、各家庭にリーフレットを1部を配布した。また、希望者には昨年度の入試問題を持ち帰れるように会場内に設置した。 4. Web サイトについては、改訂当初からの予定に沿って、「在校生の声」の追加1名（6 年女子・中一般）の取材を行った。また、「卒業生の声」は同窓会 HP と連携することで、同窓会 HP 側に「卒業生紹介（私の原点）」として、随時追加されることとなった。その他、見やすい HP の構成になるよう、細かな修正をおこなった。 5. 学校紹介ビデオリニューアル版を 2022 年度からを引き続き活用している。 6. 昨年度（2023 年度）に公募した、生徒による学校紹介動画を今年度から活用している。	1. 見学会当日の生徒に生で学校紹介を発表してもらいながら、引き続きオンライン併用の対面開催（予約・定員制）で実施する方向で考えたい。 また、昨年度の結果を受け、今年度は、文化祭直前の見学会をやめ、回数を減らしたが、累積参加数の差はなかった。 入試形態別の参加数のみならず、学年別の参加数を見ていくことで、引き続き、実施時期や実施回数、申し込み締切り時期と条件設定などの改善・検討が必要である。 2. 暑さ対策のため、入場前の待機場所にミスト散水をおこなっていたが、見学会の時期的に、暑さが厳し過ぎて、ほとんど効果が無いため、待機教室を作成した。次年度に向けては待機教室を含めたスムーズな動線を工夫したい。 3. Web サイト内にある学校案内（リーフレット電子版）の併用を SDGs の観点からも意識的に目指すことを継続する。 4. 「卒業生紹介（私の声）」を入試広報のみならず、在校生に向けても伝えられるように、同窓会と連携を濃くし、同窓会の web サイトと併せた充実を目指す。 5. リーフレット、Web サイト共に、2022 年度使用開始のため、小さな改定を継続してしながら、ブラッシュアップを図る。	本来の学校生活の様子を素材とした資源作りを、近い将来行う必要がある。その際には入試形態の変更に配慮しながらも、横浜初等部受け入れ後の教育目標・教育内容を発信し、学校の良さがわかるように学校内外への広報体制を充実させなければいけない。 たとえば、現在見学会時に配付している学校案内リーフレットや見学場所案内などを、タブレットやスマートフォンから QR コード読み取りによってアクセスできるようにするなど、紙資源の節約を図ると同時に、学校案内リーフレット電子版の活用につなげることなどが考えられる。	B	A

芸術鑑賞	人生をより豊かなものにするために、質の高い芸術に接する [3年間のローテーション（クラシック音楽→日本の古典芸能→ミュージカル・オペラなど）で、多様なジャンルに接する機会を設けている。今年度は演劇・オペラを観劇した]	【演劇・オペラ観劇】 実施日：中等部 2025年2月6日(木) 開場 11:45（座席点呼 12:05） 開演 12:15 演 目 舞台「ハリー・ポッターと呪いの子」 会 場 TBS 赤坂 ACT シアター 終演 15:55（幕間1回を含む） 高等部 2024年7月11日(木) 開場 12:15（座席点呼 12:45） 開演 13:00 終演 15:55（幕間2回を含む） 演 目 高校生のためのオペラ教室 2024「トスカ」 会 場 新国立劇場	今年度のジャンルは演劇・オペラ鑑賞。 中等部、高等部別々の演目となったが、生徒たちは概ね真剣に観劇していた。 「ハリー・ポッター」は中等部生がとても楽しんでいた様子が見られ、学年に適した演目を選択することができた。 高等部生のオペラは、多少難しい部分もあったが、生でオペラを鑑賞する機会を得ることができ、生徒たちは楽しんだようだ。	次年度のジャンルはクラシック音楽で、7月にみなとみらいほーるにて、神奈川フィルハーモニー管弦楽団の演奏を鑑賞する予定である。	オーケストラの鑑賞教室だと、普通は学校の体育館にオーケストラを招く形で開催する学校が多いため、そのようなプログラムの鑑賞教室を用意している演奏団体が多い。 本校のように、外部のホールを使用して鑑賞教室を行う場合、オーケストラとの打ち合わせに時間がかかりすぎることが多い。また、オーケストラの手配のほか、学校側がホールを予約する必要があり、費用がかさみがちである。 オーケストラの鑑賞教室をスムーズにすすめるためにホールの場所、演奏団体の選定時期をもっと早くすべき（できれば2年くらい前）である。	A	A
	自己点検	1. 各年度における教科、委員会の活動内容をまとめ総括を行う。 2. 各組織の目標設定、活動内容の評価と改善の記録が適切になされているかを確認する。 3. 保護者の学校に対する満足度を測るために、有効なアンケート項目を設定する。自己点検で得られた情報を基に、他教科、他委員会相互の情報交換を促す。公表可能な学校評価資料を作成す	現行の評価方式による作成方法が定着し、スムーズな書類作成で予定が達成された。2018年度より自己評価の客観性と透明性を高めることを目的とし、学校関係者評価を実施した。手順としては、保護者世話人の37名に本校ホームページの学校評価一覧をご覧頂き、各教科、委員会の評価が適切に行われているかの設問に4段階評価で回答して頂いた。	1. 評価書類作成の内容や作成の仕組みについて、教員の、特に年度末の他業務への影響を考えると現行の方法が最良であると考える。今後も各組織が自己点検・自己評価を材料に議論を促す仕組みを検討していく。年度間の担当者変更の際にも活用していく。 2. 保護者から目標設定と結果の数値化を求める意見もあったが、教育活動は必ずしもデータとして目標設定、結果をすることが適切とは言えず、今後も各教科、委員会で記述式の評価と分析を継続していきたい。	文科省「学校評価ガイドライン」平成28年改訂で、小中一貫校における教育目標の設定などについて示されている。横浜初等部との連携の中で、学校評価に関して文科省の指針である義務教育9年間の目標設定に加えて、本校においてはさらに高等部3年間、計12年間の中での段階的な目標設定について議論していく。学校評価が形骸化しないような取り組みは常に必要である。	B	B
1年生旅行	1. 友人との共同生活を通して、他者を理解し、社会生活や集団生活でのルール・マナーを学ぶ。 2. 野外活動などを通して、自分の役割を果たすことや仲間と協働することで友好を深める。 3. 富士山麓の生態系や地形について、実物を見聞きし、豊かな自然に触れる。	1. 事前学習として理科の授業で富士山について学ぶ。 2. 樹海、紅葉台トレッキングを通して美しい自然景観やそこに息づく動植物などの観察をする。 3. チームビルディングを通して、目標を達成できるようチームで協力し、メンバーのスキルや経験を最大限に活かすことで組織の力が最大化することを体験する。 4. 飯盒炊さんを通して、仲間意識を高め、集団の中の自分の役割について学ぶ。	1. 各プログラム、ホールアースの丁寧な指導のお陰で、無事に遂行することができた。 2. 前半組、後半組それぞれ充実した時間を過ごすことができた。 3. 集団生活を通して、うまくいかないこともあったが、自分の役割を認識し、行動しようとする姿が見られた。	1. 来年度は、今回の反省を活かし、より良いプログラムになるよう、事前指導の段階から計画的に進めていきたい。 2. 昨年度に続き、食事の面でアレルギー対応の連絡が旅行者、ホテル、食事場所間でうまく連携できなかったので、旅行者や宿舎の変更を検討する。	1. 現在の行程で続行していく場合、雨天時の代替プログラムの充実が今後の課題である。	B	B
2年生旅行	1. 東北地方の自然・歴史・文学・風土を学ぶ 2. 集団行動の意義を理解する 3. 防災学習・復興支援プログラムに取り組む 4. 現地の方々との交流を通じて地域文化の豊かさを実感する 5. クラスや学年内のコミュニケーションを深め、新しい仲間をつくる	1. 1班は月火水木、2班は火水木金の行程とし、宿泊地を花巻1泊、宮古1泊、盛岡1泊とする。 2. 平泉、花巻、遠野、三陸鉄道、東日本大震災について事前学習を行う。 3. 国語科での学びと見学地をリンクさせる。 4. 郷土芸能や郷土料理等を通して郷土文化への理解を深めさせる。 5. 各教科で学習した内容に触れさせる見学地や体験プログラムを用意する。	1. 行程通り、無事に終えることができた。 2. 集団行動での基本となるようなことを確認し、仲間との親睦を深めることができた修学旅行となった。 3. 事前学習で学んだ奥の細道』・宮沢賢治・『遠野物語』について、作品の舞台となった平泉、花巻、遠野を実際に訪れることで、各訪問地に関する理解をより深めることができた。 4. 2日目の震災学習列車乗車、3日目の田老地区での震災遺構見学で有意義な震災学習となった。	1. 2023年度の反省を受けて、2024年度は3クラス追いかけ型で、花巻1泊、宮古1泊、盛岡1泊の形に変更した。グリーンピア三陸みやこのキャパシティを勘案し、2班同時宿泊を避けるためである。 2. 2日目、震災学習列車のルートを実行した盛一釜石間に変更したが、時間に余裕がないので、ルートを再検討する必要がある。なお、今年は震災列車のルート変更に伴って、遠野ふるさと村をなくし、昼食場所は遠野市立博物館近くのあえりあ遠野になった。また、ふるさと村廃止に伴い、花巻新渡戸稲造記念館を行程に追加した。 3. 3日目の田老地区震災学習において、田老観光ホテルでの震災映像の鑑賞をこれまでは禁止としていた。だが、今年アニメ版が作成されたので、それをかわりに視聴することを検討したい。 4. 3日目の遊覧船が天候によって左右されるので、行程が直前まで確定しない難しさがあった。来年度か	すでに震災から10年以上が経過しており、これからの生徒たちは東日本大震災を体験していないことになる。そうした生徒たちへの効果的な震災学習を考えていく必要がある。	A	B

				らは廃止し、トレッキングの時間を延長して浄土ヶ浜の地形を見られるよう検討したい。			
3年生旅行	1.広島で平和について考え、瀬戸内および四国の歴史、文化、自然に触れる。 2.事前学習と現地での学習を総合した学びを行う。 3.集団の中で他者と協力し合うことを学ぶ。 4.それぞれの場でのルールを尊重し、社会の中での規律ある行動をとるよう徹底する。	【目的地】 ● 広島お好み村 ● 広島平和記念公園・資料館・被爆講話 ● 厳島神社・宮島 ● 松山市内班別研修 ● 瀬戸大橋記念館・瀬戸大橋タワー ● 中野うどん学校(体験) ● 金刀比羅宮 ● 高知県立牧野植物園 / 高知城 ● 桂浜 【主な事前学習】 1. 社会の授業：平和教育の一環として、軍拡・軍縮についてや、核兵器の現状と国際状況について学習した。また、厳島神社の歴史について学び、金毘羅宮についての映像を視聴した。 2. 国語の授業：夏目漱石「坊ちゃん」や俳句について学んだ。 3. 生物の授業：牧野植物園 生徒全員のシロツメグサのスケッチを牧野植物園に送付し、学芸員から直接助言をしていただく。 4. 牧野富太郎及び牧野植物園に関する映像視聴・高知城を知るための映像・プロジェクトX「瀬戸大橋」映像視聴 5. 松山班行動計画立案作成	・前半3クラス、後半3クラスいずれも、行程通り無事に3泊4日の旅行を実施できた。 ・広島での平和学習を通して、過去の歴史から現在の課題まで、自分事として捉えて深く考えることができた。そのため、ノーベル平和賞を被団協が受賞した際も、関心を持って捉えることができた。 ・厳島神社・宮島・金刀比羅宮では、歴史的建造物としての価値を実際に見て触れることによって理解を深めることができた。 ・松山市内班別研修では、それぞれの班で計画表を立てて行動する経験を通して、集団の中で他者と協力し合う力を身につけた。また、国語で学んだ「坊ちゃん」や正岡子規の俳句について、その地域的背景までも学ぶことができた。 ・牧野植物園と高知城では、映像だけでは知ることができないバックヤードや詳しい説明を聞くことができ、生徒の興味関心を大いに引き出すことができた。	1. 昨年度の反省を活かし、今年度は初日に宮島内の宿に宿泊することができたため、翌日の行程に余裕を持つことができた。夜に、厳島神社に行く計画を盛り込めるか要検討。 2. 金刀比羅宮では、奥社まで行く生徒を教員が把握しておいたため、スムーズに点呼を取ることができた。ホテルの奥にある金丸座は、事前学習の映像にも出ていたところだったので、金丸座への案内もすると良い。 3. 今年度は、牧野植物園と高知城のいずれかを選択して見学するようにしたが、どちらも時間が足りないほどの充実した見学になった。そのため、桂浜を削って牧野植物園と高知城に費やす時間を増やしてもいいのではないかな。桂浜は、海辺に近づく生徒が続出し、多くはお土産屋さんに時間を使っていたので、検討が必要である。	世界で戦争や核開発が行われている中で、広島での平和学習は非常に意義深いものである。戦争を感覚的に恐ろしいものとして捉えるのではなく、なぜ戦争がなくなるのか、どのようにしたら核兵器をこの世から廃絶することができるのかということについて考えを巡らせ、自分事として捉えて学ぶことが重要である。また、四国3県を巡る旅行は、充実した内容になっているものの、その地域に根差した食材や生活文化などを学ぶことはできていないため、今後もより良い内容を検討していく必要がある。 今年度は2学期に帰国する生徒が多く、事前学習が十分にできないままであったり、アレルギーへの対応が煩雑であったため、旅行に行く生徒は1学期末に復学させ、必要な情報を1学期のうちに確認できるようにすべきである。	B	A
4年生旅行	1. 北陸を軸とした中部地方の各地を地学、地理学、民俗学的な視点で観察し、地域の自然と人々の暮らしの関わりについて学ぶ 2. 事前学習と現地での見学を総合し、自発的に探究する 3. 集団生活を通して、協調性や規律性を身につける	・事前学習 1. 特別カリキュラム期間中に地学・地理学的な視点で授業をおこなう。 2. 「石川の工芸」「石川の食」「石川の歴史・文化」について、出発前にオンラインで現地専門家による講演をおこなう。 ・事後学習 .事前学習と現地での見学を総合したレポートを作成する。内容は、各自が設定したリサーチクエストに沿ったものとする。	9月からの復学者への対応に苦慮した。とくに食物アレルギーの対応について多大な労力を要した。復学者のアレルギー調査の回答から旅行までの期間が短いことに加え、食事を提供する施設や業者からのアレルギー対応メニュー、成分表の回答が遅く出発直前まで連絡を取りあうことになった。 【事前学習からつながる現地見学地】 1. 『フォッサマグナミュージアム』、『立山カルデラ砂防博物館』、『弥陀ヶ原』、『小谷露頭』、『イタイイタイ病資料館』、『年縞博物館』、『永平寺』を選択して訪れ、地理学・地学的な理解を深めることができた。 2. 『白川郷』『妙立寺』『兼六園』を訪れることで、民俗学的な理解を深めることができた。 3. 2023年度の次年度への展望にあった福井県の見学先を選択コースの目的地に取り入れた行程を実施できた。	引き続き、事前学習も含めて、北陸を軸とした中部地方の各地を地学・地理学・民俗学的な視点で観察し、地域の自然と人々の暮らしの関わりについて学ぶことを考えている。 食事のアレルギー対応について、宿泊先でインシデント直前の事象が発生した。宿泊先の変更することを念頭に下見と打ち合わせを入念に行う必要がある。	基本的に4年生の事前事後学習も含む旅行内容は完成度が高いと考えている。しかし、現行の目的にとられず、宿泊地や見学地の検討の継続は必要である。 また、荒天時のリスクに加え、近年感染症流行のリスクやアレルギー対応の増加なども加わり、考慮すべき要素が煩雑になり、業務量が肥大化しているため、教員が対応しきれなくなっている感もある。全学年が、毎年、同時期に旅行を実施すべきなのかどうか、検討するべき時が来ていると感じる。	B	B

5 年生旅行	1. 国際化しつつある現在、歴史の深い京都・奈良は日本人として一度は訪れるべき場所であり、事前学習も含め、その史跡や文化財に触れる 2. 班別自主研修によって、仲間との協調性や自主独立の精神を養う	1. 以下の 6 ヶ所に分かれて伝統工芸の体験学習を行う ①日吉屋和傘（和傘作り体験） ②亀屋良長和菓子（和菓子作り体験） ③八つ橋庵かけはし（八つ橋作り体験） ④安達くみひも館（くみひも作り体験） ⑤今井半念珠店（念珠作り体験） ⑥清水焼雲楽釜（清水焼作り体験） 2. 事前学習として、自分が研修に行く伝統工芸に関する用語について調べる。 3. 京都（1 日半）および奈良（半日）について、班別で行動計画表を事前に作成し、班ごとに計画表に沿って自主研修を行う。 4. 旅行前に得た知識と現地で見聞きしたことをつなげて得た考察を、新聞という形で作成し、提出する。	1. 伝統工芸の体験学習は、概ね無事に終了することができた。伝統工芸学習の内容としては充実しており、生徒たちも古くから守られてきた文化に対して誠実に向き合うことができた。 2. 事前学習として提出した用語の意味調べから、優秀作品を選び、学年として 1 つの辞典を作成し、しおりに掲載した。 3. 行動計画表の作成については、昨年度の反省も踏まえた上で、試行錯誤を重ねながら案をまとめることができた。当日の研修については概ね計画通り実施することができた。 4. 事後学習の新聞作成では、単なる「報告」ではなく、見聞きしたことを自分の考えと照らし合わせてアウトプットすることができた。	1. 2 班は、最終日の班別研修先まで貸し切りバスで移動したが、交通渋滞に巻き込まれる可能性もあるため、1 班同様初日に研修を実施した方が良い。 2. 伏見稲荷大社等の観光地は、外国人観光客により大混雑していた。班別研修の行き先は、混雑状況を考慮した上で決定した方が良い。	1. 伝統工芸の体験学習については、行先や学習内容、行程のどこに組み込むかについては再検討する必要がある。 2. 最近のインバウンドによるオーバーツーリズムの問題により、訪問先を別の場所へ変更せざるを得ない可能性がある。	B	B
6 年生旅行	1. 北海道に関して歴史・文化・現代社会的観点を学ぶとともに自主研修によって協調性や自立の精神を育む 2. 単なる旅行ではなく「総合的な探究の時間」としての旅行のため、事前事後学習とリンクさせての総合的な学びを目標とする 3. 個人旅行では体験しづらい自然とのふれあいや農業体験などを行程に組み込み、教育旅行としての側面を強める	1. 31 期生はコロナ禍に十分な旅行を実施できなかった背景があるので、今年度の特例として昨年度の 3 泊 4 日から 1 泊増やし、4 泊 5 日で実施する 2. 事前学習として見学地に関連した用語の意味調べをさせ用語辞典を作成させる。事後学習として実際に見学してきたことを踏まえ、考察を加えた新聞を作成させる。新聞のテーマは、北海道の歴史や都市性などの社会科学系、あるいは鮭の生態、昭和新山・有珠山など自然科学系から自身で選択させる。 3. 自主研修に向けては、班で事前に綿密なスケジュールを考えさせる。旅行当日の行動を充実させるため、所要時間や必要な金額なども記載した計画表を提出させる。 4. 下見を実施して、教育旅行としての側面を強めるための行程を旅行会社と検討する	1. 総合的に充実し、貴重な旅行になった。 2. 3 泊から 4 泊に変更となり旅行中・旅行後の生徒の様子からは満足度が高かったように思えた。 3. 事前事後学習では多くのモノ・コトを見て深く広く考察できていた。 4. 行程中に発熱者が数名出てしまったが、教員や看護師が対応にあたり、保護者も適切に対応してくださった。 5. 自主研修も計画通りに進められた。集合時間にもほとんどの班が遅れることなく集合したため旅行全体のスケジュールも変更なく進められた。 6. アレルギーに対して重篤な症状を起こす可能性のある生徒がいたが、十分に注意を払っていたためアレルギー反応が出た生徒はひとりもいなかった。 7. 利用したバス会社がとても良かった。 8. 旅行中の食事ではハンバーグやエビフライなどが多く、北海道らしさがなかった。 9. 旅行会社の対応は良かった。 10. 担当教員で下見を行ったことで旅行会社との打ち合わせもスムーズに進み、旅行の成功へと繋がった。 11. サイクリングを実施した結果、安全面に課題があった。	最終学年として深い学びを期待したい。移動距離が長い ため充実した旅行行程の立案には工夫が必要である。 1. アイヌ関連施設「ウポポイ（民族共生象徴空間）」は内容が豊富で充実していた。また、大雪山旭岳や昭和新山・有珠山コースも評価は高いが、悪天候、特に雷雨が起こることを念頭に置き、雨プランをどうするか考察する必要がある。 2. 旭山動物園や西山山麓のハイキングはとても好評だったため次年度以降も取り入れると良い。 3. 旅行中、特にホテルの食事がハンバーグやエビフライ中心で北海道らしさを感じられず味気ないので改善が必要である。 4. 今年度の自主研修は函館のみであったが、5 年では自主研修が充実しているので、もう 1 日自主研修があっても良いかもしれない。また、朝食と昼食時間を含めた函館の自主研修の時間は 5 時間では足りなかった。 5. 農業体験は体験先により充実度が異なったため、事前に体験内容の精査が必要である。 6. 「サケのふるさと千歳水族館」での体験学習は、解説も含めて学習効果が高いので次年度も実施すべきである。今年度は昨年度よりも滞在時間を延長したためさらに充実した。 7. 函館山の夜景は今後インバウンド需要が回復すると大混雑が予想されるため、その対応が必要である。	昨年同様最終学年の総合的学習の集大成としては旅行先の再検討が必要である。現状では、北海道の自然や文化を学ぶ機会の充実度改善に課題があり、社会系の学習課題も実は他学年と比較しても設定が難しい。行先を北海道で継続する場合でも、行程の大幅な変更を考えてはどうか。バス移動が長く、時間に大幅なロスがあることは懸念材料であるが、以前の道東方面など自然科学系の学習に主眼においたコースの復活も考えるべきである。または平和学習を含めた歴史・社会的学習や特徴的な自然体系による自然科学的学習も充実させられる沖縄・九州も視野に入れるべきである。	A	A

未来の学校検討委員会	1. 5 年先・10 年先を見据えて、本校における新たな教育の柱・アイディアは何であるか検討する 2. 委員だけでの検討に留まらず、多くの先生方の未来の学校に対する考えや想いを共有する機会を積極的に設ける	1. 教員を対象としたアンケートを実施（項目は以下の通り） ①授業 ②総合的な探探究の時間 ③カリキュラム ④学校行事 ⑤課外活動 ⑥施設 2. 教員を対象としたワークショップを開催	1. アンケートでは、18 名の教員（全体の¼）より回答をいただいた。方向性は多岐にわたっていたが、温度感は等しく、現在の学校に対して問題意識をお持ちであることがわかった。本校における「探究活動」をどう活性化していくのか、という点は先生方の関心の共通項となっていることがわかった。 一方、回答されていない先生方は、 ・現在の学校のままでよいのか ・回答していないけれど問題意識はあるのか ・小さな変化を望んでいるのか など、どのようにお考えなのかを知るチャンスが得られず、ぜひ多くの先生方のお話を伺う機会を設けたいと考え、ワークショップを企画・開催した。 2. アンケート結果（回答状況）を受けて、対面での自由参加型のワークショップを実施した。約 40 名の先生方にご参加いただいた。 Stay Positive を合言葉に、未来の学校で未来の生徒たちとやってみたいことについてブレインストーミングを行った。お互いの考えや想いを共有するとともに、出てきたアイディアを 1.アンケートと同じ項目について分類した。	一部の教員による考えや想いだけで議論を進めていくことのないよう、また、今年度ワークショップには別業務で参加できなかった先生方も多くいらっしゃるため、次年度についても、オープンな形での委員会を継続していく必要がある。 その中で、新学習指導要領についても視野に入れながら、教員たちから出てきた意見を委員会メンバーで集約しつつ、本校における新たな教育の柱・アイディアの案を提案する。	常に 5 年先・10 年先を見据えて、生徒を取り巻く状況の変化に応じ、新たな授業や探究活動を提案・実施していく。 しかし、限られた人的リソースで実施可能な教育活動には限界があるので、クラブ活動や学校行事の再検討・削減のみではなく、将来的にはカリキュラムの再編成についても検討していく必要がある。	A	A
------------	--	---	--	--	---	---	---